

学術論文

問いの類型論と社会的な問い——問いの基礎理論(2)

佐藤 裕

富山大学人文科学研究第78号抜刷

2023年3月

問いの類型論と社会的な問い——問いの基礎理論（2）

佐藤 裕

はじめに

本稿は、拙著「問いの基礎理論序説」（佐藤 2022、以下「前稿」とする）で明らかにしたことを下敷きに、「問いの理論」をさらに深めていこうとするものである。

まず、前稿での議論を簡単に整理しておこう。前稿の結論は以下の通りであった（佐藤 2022: 83）。

1. 問いは思考（推論）を方向付ける。
2. 問いは選択肢の提示であり、選択肢の性質は問いの語彙によって共有されている。
3. 平叙文は「問いの条件+答え」であり（命題中心主義の誤謬）、問いと答えをセットにして考えなくてはならない。
4. 問いはしばしば先取りされており、先取りされた問いを補うことによって、コミュニケーションをより正確に理解できる。

このうちの3の主張は、（最終的に）言語行為論の批判を通じて得られたものであるが、その際私は、問いの類型化が言語行為論（特に発語内行為の分類）に代わりうるものであることを示唆した。また、その際にはそれぞれの問いにおいて「問われているもの」を明確にする必要があるが、そこで必要になるのが2の「問いの語彙」である。問いの類型化は、「問われているもの」を明確に指し示すことができる問いの語彙の類型化にはかならない。

問いを類型化するにあたっては、その問いがどのような文脈で問われうるものなのかについても考慮する必要がある。その際に必要な視点が、1の主張を明らかにする過程で提示した、問いと問いの関係である。ある問いに答えるために別の問いが立てられたり（上位／下位）、ある問いの答えを前提条件にして別の問いが立てられたりする（上流／下流）。このようにある問いがどのような問いと論理的につながっているのかを明らかにすることも、問いを類型化する作業には必要だ。

以上のように、本稿は前稿の主要な結論のうち4の「問いの先取り」以外¹⁾を引き継いで、問いの類型化を試みる。これが本稿の1つ目の目的である。

すでに述べたように、問いの類型化は、「問いの語彙」の分析を通じて行うが、その過程で私は考慮しなければならない非常に重要な論点があることに気がついた。それは、問いと社会

との関りだ。前稿でも私は論文を締めくくるにあたって、問いの理論の応用範囲は個人の思考や個人間のコミュニケーションにとどまらず、「多くの人が問いを共有し、それについて共同で答えを出そうとする活動」（佐藤 2022: 83）に及ぶと書いたが、あらためて考えてみると、これは応用領域などではなく、もともと「問い」といういとなみとは切っても切り離せない論点であることが分かったのだ。そこで改めて、問いと社会との関り、すなわち「問いの社会性」について明らかにすることを、本稿の2つ目の目的とした。

問いの類型化は、言語行為論に代わりうるものだと先ほど説明したが、実はそれだけではなく、もっと大きな意味を持っている。前項の結論3は、平叙文（あるいは命題）が「問いの条件+答え」であるという主張であった。ということは、私たちの（平叙文で表現される）「知識」が（すべて）何らかの問いに対する答えである、ということだ。これは少しわかりにくいと思うので、ごく簡単に説明しておこう。

例えば「本能寺の変は1582年に起こった」という知識は、「本能寺の変はいつ起こったのか」とか「1582年はどういう年だったのか」という問いに対する答えである。そのため、その知識の価値は、それを答えとする問いが問われうるものなのかどうか依存する。つまり、「本能寺の変はいつ起こったのだろう」といった疑問を誰も持たなければ、「本能寺の変は1582年に起こった」という知識は価値を持たないのだ。以上のことから、知識を理解するためには、それを答えにする問いとセットで考えなくてはならないことが分かる。

このように考えると、問いの類型化とは、それと関連する「知識」について考えるための足掛かりになりうる。そしてさらに、その問いが社会的なものであるならば、知識に対する社会的アプローチ、つまり知識社会学の1つの方法（これを問答論的知識社会学²⁾と命名したい）を提案することになるだろう。

以上のような考えから、本稿の3つ目の目的を、問答論的知識社会学の提案としたい。その際、その具体的な対象の事例として、社会科学における説明の問いを取り上げたいと思う。

本稿では、以上の3つの目的ごとに節を構成して議論を進めていくが、最初に問いと社会性についての考察から始め、それから問いの類型化、問答論的知識社会学という順に進めていきたい。これは、問いの類型化をある程度包括的な形で説明するには、問いの社会性についての議論が前提になるからだ。

それでは、問いの社会性から議論を始めたいが、その前に、前稿で提示した基本概念について、若干の修正と再整理を行いたい。これは、本稿を構想する中で、前稿執筆時には思い至らなかった問題が生じたためである。

1. 基本概念の修正と再整理

1) 「問い」と「質問」

前稿では、「問い」という言葉と「質問」という言葉を、あまり区別せずに使っていた。これは、下敷きにしていた入江の論考（入江 2020）などにおいても明確な区別をせず、用語法としても、「問い」一般について「相関質問」といった表現を用いていたため、それに倣ったという部分が多い。しかし、問いの社会性について考えるためには、「他者に対して問う」という行為の持つ意味を明確にする必要があるため、両者をはっきりと区別しておく必要があると考えた。そこで、本稿では、他者に対して問い、答えを得ようとするいとなみのみを「質問」とし、自問することも含めた「問う」といとなみ一般を「問い」と表現することとした。この結果、前稿で用いていた「選択質問」「メタ質問」「下位質問」といった用語法が使えなくなり、それぞれ「選択の問い」「二次的な問い」「下位の問い」といった形で言い換えることにする。ただし、「選択の問い」という概念は、次に説明するように、その概念自体を使用する必要がなくなった。

2) 選択質問

前稿では、問いをおおきく選択質問（選択の問い）と記述質問に分類したが、記述質問は多くの場合選択質問に帰着すると考えた。そのため、本稿では問いは基本的に選択質問（選択の問い）であるという前提で議論を進めることにする。そのことによって、議論の対象から外れてしまう問題もあるのだが、まずは問いについての基本的な理論をしっかり固めていきたいと考えて、このような判断をした。そのため、本稿では「選択質問」（選択の問い）という概念は全く用いない。

なお、「記述質問」という概念であるが、本稿では「記述」という言葉を異なる文脈で用いており、「記述の問い」という言葉を前稿における「記述質問」とは全く異なる意味で用いている。ややこしくなって申し訳ないが、本稿での「記述の問い」と前稿での「記述質問」は別物であるをご理解いただきたい。

3) 問いの語彙

前稿ではいくつかの疑問詞（「どこ」や「だれ」）を「問いの語彙」に含めて考えていたが、本稿では疑問詞は問いの語彙ではないと考えることにする。これは、疑問詞による表現と問いの語彙による表現の対比を強調したいためである。

例えば、「あなたは誰ですか」というのは疑問詞による表現であり、「あなたの名前を教えてください」（または、「あなたの名前は何ですか」）というのが問いの語彙による表現となる（「名前」が問いの語彙である）。このように対比させれば、「誰」という疑問詞が「答えの範囲」を

必ずしも十分明確にはしていないことが分かると思う（名前を問うているのかもしれないし、職業や立場を問うているのかもしれない）。同様に、「どこ」に対して「都道府県」とか「住所」の方が、「いつ」に対しても「日付」や「時刻」といった表現の方が、より明確に答えの範囲を示している。

前稿では問いの語彙を、問いの「ものさし」を表現する言葉であると説明したが、この表現はまだ十分に明晰であるとは言えない。そこで、本稿ではもう少し明確な説明を用意した。これは5つ目のセクションで説明したい。

4) 問いの条件

「問いの条件」という言葉は、前稿では、平叙文が「問いの条件+答え」である、といった表現や、「**相関質問**」³⁾は「問いの条件+選択肢」だという考え方の中で用いた言葉だ。このうちの後者は、よく考えると「相関質問」に限ったことではない。問い一般が「問いの条件+選択肢」なのだ。

ということは、問いの条件という概念は問いを構成する不可欠の要素だということになる。前稿ではこの概念をそこまで重視してはおらず、そのためあまり深く考えずにこのような言葉を用いていたのだが、改めて考えてみると、問いの要素として「問いの条件」がある、という表現は「問い」が重複して煩わしく、かといって「問い」を取れば単なる「条件」となってしまって、その意味するところが分かりにくい。そのため、本稿ではこれを「(問いの) 前提条件」と呼ぶことにしたい。

5) 問いの3つの要素

(問いの) 前提条件が問いを構成する要素の1つだとすると、そのほかの要素は何だろうか。前稿では相関質問を「問いの条件+選択肢」であると説明し、これは問い一般にあてはまると考えれば、「前提条件」と「選択肢」が問いの構成要素だということになる。

前稿では「選択肢」という言葉を、「可能なく答え>の集合」(佐藤 2022: 63)であると説明しているので、問いを構成する要素としては、「答え⁴⁾の範囲」と表現した方が分かりやすいだろう。「いつ」という問いの場合は日付や時刻という範囲の中から答えを選ばなくてはならないし、「誰」という問いの場合は人物という範囲の中から答えを選ぶ必要がある。もし答えの範囲が特定されていなければ、問いは成立しない。

それでは、問いの構成要素を、「前提条件」と「答えの範囲」の2つだと考えてよいだろうか。他に必要な要素はないだろうか。例えば「あなたはいつ東京に行きましたか」という問いであれば、「あなた(答える側にとっては「私」)」「東京」「行った」が前提条件で、「いつ」が示す日付や時刻が「答えの範囲」となる。このように考えれば、この疑問文が表現している内容は、確かに「前提条件」と「答えの範囲」だ。しかし、それだけで問いが成立するわけでは

ない。答えはある範囲の中から選ばなくてはならないのだが、どうやって選ぶのか、つまり答えの選択基準が示されていなければ問いに答えることはできないからだ。

前稿で説明したように、答えを選ぶ基準つまり妥当性は、問い自体だけでなく上位の問いや下流の問いにも依存するため、妥当性すべてが問い自体の要素ではない。しかし、もちろん問いそのものにも妥当性の基準はある。例えば先ほどの質問であれば、実際にその答えの日付や時刻に私が東京に行ったこと（真理性）が答えを選ぶ基準になるし、それだけでなく、その答えがより狭い範囲（正確）であることも、通常は妥当性の基準になるだろう（「秋ごろ」という答えも「10月」という答えも真理性という条件を満たすとき、一般的には後者の方がより妥当な答えであろう）。もちろんこれは、「いつ」という問いに共通する性質だ。

以上の考察から、本稿では問いの構成要素を「前提条件」「答えの範囲」「答えの選択基準」の3つであると考え、この3つの要素が与えられれば、私たちは問いに答えることができるのだ。言い換えるなら、問いとはある前提条件の下で、ある範囲から、ある選択基準によって答えを選ぶことなのだ。

この3つの要素のうち、答えの範囲と答えの選択基準は、問いの種類ごとに固有の要素であり、前提条件は具体的な問いによって変化する部分だ。つまり、「いつ」という問いに共通するのが答えの範囲（日付や時刻）と答えの選択基準（真理性と正確さ）であり、個別具体的な問いによって前提条件（「私が」「東京に」「行った」など）が変化するということだ。

問いの語彙は、問いの要素のうち、答えの範囲と答えの選択基準を表している。例えば「日付」という問いの語彙は、地球から見た太陽の動きを基準に時間を区切って数値を与え（答えの範囲）、何らかの出来事その数値のうちのどれに該当する範囲で生じたのかを明らかにするよう要求する（答えの選択基準）。また、「高さ」という問いの語彙は、答えの範囲は実数であり、前提条件として提示された物体の、地面から鉛直方向に最も離れた部分と地面の間の距離に合致する、できるだけ正確な数値を選ぶことが答えの選択基準だ。このように、問いの語彙が問いの要素のうちの2つを規定しているため、残りの前提条件が与えられれば問いが成立することになる。

以上の考察から、問いの語彙の重要性を改めて確認することができたのではないかと思う。本稿では、問いの語彙の分析を通じて、考察を進めていきたい。

2. 問いと社会性

「問い」というものの全体像を描くには、問いの社会性という視点が必要だ。その理由は大

大きく分けて2つあり、1つは私たちの「問い」といういとなみが社会的なものであること、もう1つは私たちが問う対象の中に社会的なものがあることだ。この2つは互いに関係しているが、まず問いと社会性がどのように関わっているのかを明らかにしたい。

1) 質問と社会性

問いと社会性との関係を考えるためには、「問い」ではなく「質問」、つまり他者に対して問いかける行為が考察の糸口になる。

事実を知る者と知識を持つ者への質問

ではまず、出発点として、私たちはなぜ質問をするのかを考えていただきたい。他者に対して何かを問い、答えを得ようとするのはなぜだろうか。少し角度を変えた問い方にとすると、私たちはどのような場合に他者に質問をしようとするのだろうか。

まず考えられるのは、自分が知らない何かを他者が知っており、私がそれについて知りたいと思う場合だろう⁵⁾。例えば交通事故の目撃者に「何が起こったのか」と尋ねる(質問1)のは、自分が知らない事故の様子を目撃者が知っており、なおかつ自分がそれを知りたいと思うからだ。また、生徒が先生に「地震はなぜ起こるのですか」と尋ねる(質問2)のも、生徒が知らないことを先生が知っており、生徒がそれを知りたいと思うからだ。

このような質問が成立するためには、自分が知りたいと思う答えと、相手が知っている答えが一致しているはずだという信念が必要だ。質問1の場合であれば、目撃者の証言は、自分が現場に居合わせた場合に見たはずのものと一致しているはずだと信じているからこそ、目撃者に「何が起こったのか」と問うことができる。質問2の場合も、先生が知っている「正しい」答えが、自分にとっても「正しい」答えであると信じているからこそ、質問が成立する。

つまり、この種の問いは「私にとっての問い」ではなく、「私たちにとっての問い」であり、それゆえ「私たち」に含まれるある人の答えは他のある人の答えと一致するはずだという信念が存在していることが、問いの成立条件となっているのだ。このような「私たちにとっての問い」を、本稿では「社会的な問い」と呼ぶことにする。

人間という生き物は、自らの五感によって周囲の状況を知るだけでなく、他の個体(他者)からも情報を得ることによって認識できる範囲を拡大させている。もちろん、人間以外の動物でも、群れの中の1頭が危険を察知するとそれを群れ全体に知らせることができるなど、「社会的な認識」の仕組みを持つ種も存在するが、人間の場合は「問い」といういとなみを持つことによって、社会的な認識の範囲をいくらかでも広げることができ、なおかつ正確な情報交換が可能になっている。目撃者からの情報提供は「どこで」「いつ」「どんなふうに」といった問いによって、より正確で多面的な記述となるのだ。

社会的な問いについての考察を進めるために、質問1と質問2についてももう少し考えてみよう。どちらの質問も、相手が「答え」を知っていると質問者が考えていることが、質問が成立する条件になっているが、それでは、なぜ相手が答えを知っていると考えられるのだろうか。これについては、質問1と質問2では少し事情が異なる。

質問1の場合は、目撃者が直接現場を見たことが、答えが共有できる理由になっている。つまり、目撃者は「事実を知る者」なのだ。これに対して、質問2の場合は少し複雑だ。まず答えは直接観察できる事実ではなく、推論によって到達する「説明」（詳しくは第3節）である。そのため、教師は「事実を知る者」というよりは「知識を持つ者」という呼び方がふさわしい。教師の持つ知識は、教師自身が直接観察したものでもないし、教師自身が推論によって到達したものでもない。それは、先人たちの知的ないとなみの中で生み出され、検討され、（少なくとも暫定的には）正しいものだと評価された知識、つまり社会的な問いによって生み出された、社会的な答えだ。

私たち人間は、例えば何らかの出来事の「説明」などについて、多くの人が意見や主張を交換しながら検討を行い、共有できる答えを見出そうとする。これもまさに「社会的な問い」である。科学や学問と言われるものはまさにそのようないとなみだ。そして、そのようないとなみによって得られた「答え」を私たちは、(社会的に) 正しいものとして共有する。これが「社会的な答え」である。

蓄積された「社会的な答え」の一部は、書物として記録されたり、口頭で伝えられたりしながら、世代を超えて引き継がれていく。そのようないとなみの中で特に組織的に行われているのが学校教育だ。教師は学校という制度の中で、引き継がれるべき「社会的な答え」を児童や生徒などに伝える役割を持っている。これが、先生の答えが「正しい」と考えられる理由だ。

主張と意見を問う質問（討論の問い）

質問1と質問2は、どちらも質問する相手が（私たちにとって）「正しい」答えを知っていなければ成立しない質問だったが、そのような前提条件を必要としない質問も存在する。例えば、「このプロジェクトは成功すると思いますか」（質問3）といった質問だ。

この質問の場合、「思いますか」という表現からわかるように、質問者は相手の答えが「正しい」答えであることを期待しているのではなく、あくまでも1つの「意見」として受け止めようとしている。つまりこれは「意見を問う質問」だ。意見を問う質問（後で説明するように主張を問う質問も同様）は、その答えを直接「私たちにとっての正しい答え」として採用するわけではない。この意味では、質問3は質問1や質問2とは異なる性質を持つ。では、私たちはなぜ他者の意見や主張を問うのだろうか。

私たちが他者から意見や主張を得たとき、それをそのまま自らの「答え」とすることはしない

が、何らかの吟味を加えたうえで「答え」とすることはある。例えばある事実についての主張であれば、その主張の根拠を確認したうえで、十分に納得できれば「答え」として採用するかもしれない。あるいは、複数の主張や意見を比較したうえで、最も有力なものを「答え」として採用することもあるし、意見の場合は複数の意見が共存する状態を「答え」とすることもあある（例えば「意見が分かれている」という答えがあり得るということ）。つまり、意見や主張は、社会的な問いに対して答えを求める過程において必要な問いであると理解することができる。そのため、これらの問いを「討論の問い」と呼びたい。

主張は社会的な問い（といういとなみ）の一部である、という見解は、言葉にするとそれほど特殊な考え方のようには見えないだろうが、実はこれは、極めて重要な意味を持っている。同じく「主張」を重視した理論を提唱するロバート・K・ブランダムムの考え方と対比させれば、その意味は鮮明になる。

ブランダムムは推論といういとなみを、主張と主張が理由を与え求めるという関係によって連なっていくものだと考えた⁹⁾。ある主張を行えば（主張にコミットすれば）、その主張を正当化する理由を求められるが、その理由もまた1つの主張だし、ある主張にコミットすれば、それを理由とする別の主張が可能になる。このように、ブランダムムは推論を主張の連なりだと捉えている。そして、ここで特に注目してほしいのは、彼が主張と主張との連なりを規範的なものだと考えたことだ。

例えばある人がある主張をした（コミットした）とき、そのあとにその主張と論理的に矛盾する主張をする（コミットする）ことはできない。「AはBである」と主張すると同時に同じ口で「AはBでない」と主張してはならないということだ。

このように、推論を規範的なものだとする考え方は、極めて画期的であると私は評価している。それは推論といういとなみをよりリアルに、より柔軟に記述、分析することを可能にする考え方だからだ。

しかし、推論が規範的だという考え方には、説明するべき重要な論点がある。それは「なぜ」推論が規範的なのかということだ。規範性を持つという「事実」は客観的事実ではなく社会的な事実だ。つまり何らかの理由があって規範が作られたものであるはずだ。ではその理由とは何だろうか。

実は私は一度この疑問に答えを出そうと試みたことがあるのだが、その時は十分満足できる答えにはいたらなかった（佐藤 2019a）。しかし、本書では明確な答えを提示できる。それが「社会的な問い」だ。つまり、社会的に共有できる答えを見出すために規範性が必要なのだ。もしいくらでも論理的に矛盾したことを主張してよければ、議論が成立せず、答えを共有することができなくなってしまう。だからこそ、推論の規範性は必要なのだ。

以前は十分な答えを出せなかったことが、今は自信をもって答えを出せるのは、問答論的ア

プローチの持つ力によるものだ。ブランダムも（そして先の論考での私も）主張を独立した行為であるかのように捉えていた。つまり、「主張する」ことについて考えていたのだ。しかし、問答論では主張という行為ではなく「主張を問う」という問いについて考える。これが前稿で提案した問いの基礎理論の核心的なアイデアだ。

私たちはなぜ主張をするのか、という問いを立ててみても、それは主張したいことがあるからとしか答えられず、さらになぜ主張をしたいのかと問えば、それはそれぞれの場合によって異なる理由があるからであって、普遍的な理由を見出すことはできない。

しかし、私たちはなぜ（他者の）主張を問うのかと問えば、事情は異なる。私たちは多くの人が知恵を出し合って、より正しい（あるいは妥当な）結論に至ろうとする。そのために他者の主張を問わねばならない。つまり、「社会的な問い」といういとなみがあるからこそ、初めて主張や意見が必要になるということが理解できるようになる。

それでは、ここまでの議論をまとめてみたい。

私たちが質問をするのは、問いを共有しており、答えもまた共有できると考えているからだ。つまり質問は社会的な問いといういとなみが前提になっている。ある人々が「事実を知る者」とであると（社会的に）位置づけられたり、「知識を持つ者」とであると位置づけられたりしているとき、私たちはそれらの人々の答えを、社会的に「正しい」答えとして受け止めようとする。

また、いくつかの質問は、社会的な問いを前提にしている。それが意見や主張を問う質問（討論の問い）であり、他にも理由や根拠を問う質問（推論の問い）がこれにあたる（推論の問いはここまでの議論では扱わなかったが、次節で詳しく説明する）。このことから、問いを類型化し、問いの全体像を描こうとする際に、社会的な問いという概念は必須であることが分かる⁷⁾。

2) 問われる対象の社会性

前のセクションでは、問いと社会性との関わり、言い換えるなら、「問う側」の社会性を扱ったが、「問われる側」つまり問いの対象の社会性についても考える必要がある。この論点についての議論の入り口となるのは、事実と評価の区別だ。

事実と評価の区別は、問答論的な観点からは、事実の問いと評価の問いの区別ということになる。この2つの問いが異なるものであることについては説明の必要がないだろうが、それでは、どこが、なぜ異なるのだろうか。

両者の違いは、それらが社会的な問いとして立てられた場合にどうなるのかを考えれば明確になる。事実、より正確に言えば客観的事実についての問いは、誰が答えても答えが必ず一致するはずだと考えられている。例えばある物体がある場所に「存在するかどうか」という問い

は、人にとって答えが異なることはない（はずだ）。そのため、事実についての社会的な問いは、本来一致するはずの答えを「探し求める」という形になる。

これに対して、評価についての問いは、答えが人によって異なることが許容される。ある食べ物が好きか嫌いかと問われれば、好きだと答える人も嫌いだと答える人もともに存在するのはごく普通のことだ。そのため、少なくとも社会的に「好きか嫌いか」を問うことには意味を見出すことができない。つまり、（好きか嫌いかといった）評価については、社会的な問いが成立しないのだ。このことから、私たちが事実と評価を区別するのは、問いを共有しようとする、つまり社会的な問いといういとなみを行うからだと考えられまいだろうか。

もし、私たちが問いを誰とも共有せず、1人で認識し、1人で答えを出すことしかしなければ、そもそも事実と評価を区別する必要はない。目の前にあるモノが何であり、それが好きなのか嫌いなのかを判断するのは一連の流れであり、どこかに切れ目を設ける必要はないからだ。しかし、自分が直接見ているものだけでなく、他者の観察からも情報を集めようとするれば、他者の答えをそのまま受け入れてよい情報と、必ずしもそのまま受け入れることができない情報を区別する必要が生じる。誰かが認識した客観的事実は自分もそのまま事実として受け入れてよいが、誰かが好きだからといって自分もまた好きだとは限らないからだ。

以上のことから、事実と評価の区別は、社会的な問いを前提としていると考えられる。

ここまででは評価を好き／嫌いのような個人的評価に限定していたが、よく考えてみると、評価の問いには社会的な問いにはなじまないような問いだけでなく、社会的な問いが立てられるものも存在する。例えば、ある動物が危険であるかそうでないかといった問いは、（身体能力や耐性などで）人によって評価が異なることは十分に考えられるが、一方では、その動物が一般的にはどの程度危険なのかを評価し、それを知識として共有することも、私たちにっては有用であり、実際に行っていることだ。このような評価は、社会的評価と呼ぶことができる。

社会的評価を問う問いは、共有された答え（社会的な答え）を得ようとするいとなみであり、その意味において社会的な問いである。ただ、客観的事実についての社会的な問いが、本来一致するはずの答えを探し求める、という性質を持つものに対して、社会的評価についての社会的な問いでは、答えが本来は一致するとは限らないにも関わらず、あえて共通の答えを作り出そうとする。そして、そのようにして一度作り出された評価は、ある種の実実性を帯び、探し求める対象にもなっていく。例えばある動物が危険であるかどうかは客観的事実ではないが⁸⁾、私たちはその評価を知識として共有して記録している。そのため、書物やインターネットなどで「調べる」ことができる（問うことができる）のだ。以上のことから、社会的評価の持つ実実性は、問いによって作り出された実実性だと考えることができる。

社会的評価は、社会性を持つ評価であったが、事実についても社会性を持つものがある。それは社会的事実と呼ぶことができるだろう。例えば、私たちは何かを所有しているということを、「事実」として捉えているが、これは厳密に考えれば客観的事実とは言えない。ある土地が誰かの所有物であるということは、登記事項証明書などによって確認できるが、そのような文書は一定のルール（法）があるから初めて効力を持つ。つまり、所有という「事実」はあるルールの下での「事実」だ。また、親子関係は遺伝的なつながりだけに着目すれば客観的事実だが、実際には遺伝的なつながりがあっても法的には親子だとは認められないことがあるし⁹⁾、逆に遺伝的なつながりがなくても法的には親子である場合もあるので、ルールの下での事実、つまり社会的事実としての側面を持つ。

社会的事実の持つ事実性もまた、評価と同じように問いによって作られた事実性だ。土地を占有して利用したいと思う者が複数現れて争うことがあるからこそ、その土地は誰のものなのかという社会的な問いが生まれ、その共有された答えとして土地の所有という「事実」が作られる。親子関係もまた、この子の親は誰か、などの（社会的な）問いがあるからこそ、親子関係という「事実」が必要になるのだ。

このセクションでは、事実と評価の違いから考察を始め、それが社会的な問いと関連していることを明らかにした。そしてさらに、社会的な問いによって事実性が作られる、社会的事実と社会的評価を、客観的事実や個人的評価と区別しなくてはならないことを示した。

これらを踏まえれば、従来からの枠組みである「事実と評価」は、問答論的な視点からは、客観的事実の問い、個人的評価の問い、そして社会的事実または社会的評価の問い（この2つはひとまとめにしておくほうが良いと思う）という3つに分類できることが分かる。そしてこれらの違いは、基本的に社会的な問いとの関りで説明できる。客観的事実の問いは（1つに定まるはずの）「正しい」社会的な答えを追い求める問いであり、個人的評価についての問いは社会的な問いが成立しない（意味をなさない）¹⁰⁾。そして、社会的事実または社会的評価の問いは、答えを探し求めるのではなく作り出す問いであり、作られた（共有された）答えはある種の事実性を帯びて、それ自体が問われる対象となる。

それでは、この節の議論をまとめておこう。この節での私の主張を一言でまとめるなら、問いを類型化するにあたっては、社会的な問いを意識しなくてはならない、ということになる。

社会的な問いに答えるプロセスは、そのために必要な問いのタイプを作り出す。それが、討論の問いであったし、それらを補強する推論の問いも同様だ。そのため、これらを問いの1つの類型として整理することが考えられる。

社会的事実または社会的評価の問いは、客観的事実の問いや個人的評価の問いとは異なる性

質を持っているので、これらを区別して類型化を行わなくてはならない。また、社会的な問いにおいて答えが1つに定まるか、社会的な問いが意味をなさないか、あるいは社会的な問いによって答えが作られるのかという違いは、(事実や評価だけでなく)ほかの種類問いにおいても意識する必要があるかもしれない。

こういったことを踏まえて、問いの類型化について考えていきたい。

3. 問いの類型化

これから問いの類型化についての議論を始めていくのだが、私なりの「答え」を提示する前に行わなければならない作業がまだいくつか残っている。それは、「なぜ」の問いと心の問いの分析だ。

「なぜ」の問いは問いの類型化において重要な位置を占めることが十分予想されるが、実はその具体的な中身はかなり曖昧だ。そのため「なぜ」という問いが何を問うているのかを、問いの語彙を用いることによって明らかにする必要がある。

心の問いは、人の内面、意思や思考や価値観や感情などについての問いだが、私たちがそのようなものについて問おうとすることも、問いの世界の多様性、複雑性に大いに関与している。そこで、心の問いの性質についても、ある程度の考察をしておきたい。

1) 「なぜ」の問い

「なぜ」という問いは何を問うているのだろうか。この漠然とした疑問に対して明確な答えを得るためには、問いの語彙を用いることが必要だ。つまり、「なぜ」という疑問詞を用いた表現を、問いの語彙による表現に置き換えて考えてみるということだ。

実は、この論点については、前稿でも参考にした入江によってある仮説が提唱されている。それは、「なぜ」の問いは、原因、根拠、理由の3つのいずれかを問う問いだ、というものだ(入江2014)。

入江が「なぜ」はこの3種類であるとする根拠は以下の通りだ。

平叙文で記述できる事柄を、①自然的出来事ないし状態、②心的作用および行為、③思考ないし言語の世界、に分けることが出来る」とすると、①について「なぜ」と問うときには、原因を問うことになるだろう。②については、感覚や知覚や記憶について「なぜ」と問うときには、原因を問うことになり、感情、想像、意思、思考および行為について問うときには、理由を問うことになるだろう。そして③について「なぜ」と問うときには、根拠を問うことになる。(入江2014: 64)

ただし、入江もこれが十分な論証であるとは考えておらず、反証例が見つからないことによ

る暫定的な主張だ。

私は入江のこの主張について、「なぜ」が3種類であるという点については同意できるものの、なぜこの3種類なのかという点については、違和感を抱いてきた。それは、3種類がそれぞれ全く異なるのではなく、それらの中にある種の親和性が見いだせる組み合わせが複数あると思われるからだ。

その組み合わせの1つ目は、根拠と理由だ。この2つの問いは、日常的に使う言葉としては、あまり区別なく用いられる（場合がある）。例えば、あなたが何かの主張をしたとして、それについて「なぜあなたはそう思うのか」と問われたときに要求されているのは、「根拠」かもしれないし「理由」かもしれないし、どちらであるのかあいまいな場合もあるかもしれない。このようなことから、根拠と理由には親和性が認められる。

一方、原因と理由にも親和性が認められる。入江は原因—結果と理由—行為の関係が同質かどうかを議論しているのだが（入江 2014: 65）、確かに何かの出来事が生じたときに、その原因を問うこともできるし、その出来事が行為によって構成されている場合には、原因を問うのと同じような感覚で理由を問うことがあるだろう。このようなことから、原因と理由にも親和性が認められる。

根拠と理由に親和性があり、原因と理由にも親和性があるとすれば、どちらの組み合わせにも理由が含まれているのはどういうことだろうか。理由は実際には2種類の異なる内容を含んでいるのだろうか。

この疑問に対する私の答えは、次のようなものだ。

まず、「なぜ」の問いは、それが問われる文脈の違いから2つに分類することができる。1つが根拠と理由を含む問いであり、もう1つが原因と理由を含む問いだ。そして、どちらにも理由が含まれているのは、根拠とペアになる「理由」と原因とペアになる「理由」が実質的に同じものであるからだ。

まず根拠と理由を含む問いから説明しよう。何らかの主張が行われたり、意見が提示されたりしたとき、私たちはそれどのように受け止めればよいのかを考えるために、その主張に至った過程や意見を持つに至った過程を知ろうとする。その時問われるのが推論の問いだ。「なぜあなたは○○だと主張するのか」という問いに「それはこのような実験データがあるからだ」と答えるなら、その実験データは根拠であり、それに基づいて推論が行われたのだということが分かる。「なぜあなたは○○に賛成するのか」と問われて「その方が自分にとって利益になるからだ」と答えたなら、その答えは理由であり、それに基づいて推論が行われたことが分かる。大まかに言って、主張に対して根拠が、意見に対して理由がそれぞれ対応すると考えてよいと思うが、入江の言うように行為に対して理由が対応する。この場合も行為を産出する推

論、つまり実践的推論が行われていると考えることができる¹¹⁾。以上のことから、根拠と理由を含む問いは「推論の問い」と呼ぶことができるだろう。

それでは、原因と理由を含む問いについてはどうだろうか。例えばある交通事故が「なぜ」起こったのかという問いは、明らかに原因の問いだが、原因の1つに一方の当事者のスピード違反があると分かったとき、「なぜ」事故が起こるほどのスピードを出したのかという問いは、原因ではなく理由を問うていると考えられる。この例からも、原因と理由には親和性がありつつも異なる問いであることがわかる。

「スピードを出した」ことについて原因ではなく理由を問いたくなるのは、それが行為であり、人の意志が関与しているからだろう。この論点は入江も指摘するように（入江 2014: 65）、行為の因果説対反因果説という論争とかかわりを持つが、本稿ではそれには立ち入らない。本稿での議論は、原因と理由の比較ではなく、原因の問いと理由の問いの比較であり、両者は全く異なる議論だからだ。

では、原因の問いと（この場合での）理由の問いを含む問いは、どのような言葉で表現すればよいだろうか。私は「説明の問い」という表現が適切だと思う。説明の問いとは、何らかの出来事が生じる条件を明らかにしようとする問いだ。ある交通事故がなぜ起こったのかという問いに対して、スピード違反という原因を答えとして与えるということは、（その交通事故については）スピード違反という条件があった場合に事故が生じ、もしそれがなければ事故が起こらなかっただろうと判断していることを示している。これに対して意志が関与する行為については、ある行為がなされる条件を、心の働き、または推論に求めるため、スピードの出しすぎに対して「急いでいた」とか「スピードを出しても大丈夫だと思った」といった理由による説明がなされるのだ。

このように考えると、推論の問いにも説明の問いにも理由が現れるのはなぜなのかが見えてくる。説明としての理由は、説明であると同時に推論でもある、つまり両者は事実上同じものなのだ¹²⁾。

最後に、推論の問いと説明の問いの両方を「なぜ」という疑問詞で表現できるのはなぜなのかを考えてみたい。実は、これまでの説明では推論の問いと説明の問いという異なる言葉を当ててはいるが、推論の問いは説明の問いの一種だと考えることも出来る。例えば、何らかの主張をしたときに、「どうしてそのような主張が可能なのか説明してください」と要求することができるが、この時要求されているのは明らかに「根拠」だ。つまり、私たちは根拠や（推論としての）理由を要求する際にも、「説明」という言葉を使うことがある。このことから、少なくとも日常的な用語法のレベルにおいては、推論の問いは説明の問いの一種だと言えるだろう。

にもかかわらず、推論と（これまで本稿で用いてきた）説明を区別する必要があるのは、両者が説明しようとする対象が異なるからだ。原因による説明は、認識する対象である客体の説明であるのに対して、根拠による説明は認識する側である主体の説明だと考えられる。そして、

自らの推論を説明する際には（推論としての）理由が問われ、他者の推論を説明する際には（説明としての）理由が問われる、ということになる。このように、同じ説明であっても、客体についての説明なのか、それとも主体についての説明なのかという違いによって、問いとしての性質が異なると考えればよいだろう。

それではこれまでの議論をまとめてみよう。「なぜ」の問いは、大きく分けて推論の問い（根拠と理由）と説明の問い（原因と理由）に分けることができ、両者に含まれる理由の問いは事実上同じものなので、「なぜ」は、根拠、理由、原因の3種類である。これが本稿での結論だ。

2) 心の問い

これまでの議論では、問いのカテゴリーのそれぞれに2種類の問いを割り当てる説明をしてきた。事実と評価、主張と意見、根拠と理由、原因と理由という組み合わせだ。なぜそれぞれ2つずつなのか。それを説明するのが心の問いという概念だ。

やや大雑把な捉え方だが、先にあげた組み合わせの后者、つまり、評価、意見、理由が心の問いに該当する。大雑把だと断ったのは、これらを厳密な学術用語ではなく、日常的に使われる言葉として見た場合、必ずしも明確には区別されていないと思われるからだ。しかし、事実、主張、根拠、原因というグループと、評価、意見、理由というグループを比較してみれば、これらのグループ内の共通性と、グループ間の異質性があることは明らかだろう。

前者（心の問いに対して「世界の問い」と呼ぶことにする）は、個人に依存しないと考えられる問いだ。誰が見ても事実は事実、ある主張が正しいければ他の誰にとっても正しいはず、根拠も原因も基本的に事実に基づいている。これに対して后者は、個人に依存し、「人それぞれ」の答えが許容される。（個人的）評価も意見も理由も、人それぞれであって構わないし、むしろ多様であることが推奨される場合さえある。

世界の問いと心の問いのもう1つの違いは、前者は（原理的には）正しく認識し、確認する方法があるのに対して、后者は基本的に本人にしか知ることができないとされており、そのため他者は質問によってしかそれを知る方法がない、ということだ。もちろん、評価や意見や理由を他者が推測することは可能だし、本人の申告よりも他者による推測の方が社会的に重視される場合もあるが、その場合は本人が「うそをついている」（と考えられている）のであって、もし他者の推測が正しいのであれば本人がそれを知らないはずはない（と考えられている）¹³⁾。

心の問いは、個別的で多様性を持ち、なおかつ私密的な性格があるため、極めてデリケートな性質を持つ。例えば「動機の語彙」のように、心の中の真実よりも他者から理解される可能性によって答えが選ばれるかもしれないし、他者によって誘導された答えがいつの間にか本人にとっての答えになってしまうかもしれない。つまり、世界の問いのように、真偽という基準

がいつでも厳密に適用できるとは限らないのだ。このようなことから、問いの類型化において両者の区別は重要だろう。

3) 問いの類型化の枠組み

それでは、これまでの議論を踏まえて、問いを類型化する試みを始めたいと思う。あらかじめ大まかな構図を説明しておく、まず中心に基本となる問い（記述の問い）があり、それぞれとの関係をもつ2つの系列がある、という形になっている。

記述の問い

まず、すべての問いの中で最も基本的なものは、事実の問いと評価の問いであり、これらをまとめて、記述の問いと呼びたい。

記述の問いが最も基本的なものだと考えるのは、それらの問いは人間以外の動物でも持ち得る問いだと考えられるからだ。犬や猫などでも、目の前にある物に興味を持ち、それがどういふものなのかを確かめようとする行動が観察されるし、もっと原始的な動物でも、自らの置かれた環境について情報を集めるためのアクションは起こしているだろう。

最も原始的な記述の問いは、目の前にある物を記述するだけの問いだが、直接見る（感じる）ことができないものについて、推測によって答えを出すような問いも、人間だけの特権ではない。例えば、何らかの痕跡から獲物の存在を推測したり、数秒後、あるいは数分後の状態を予想したりすることも、ある程度の知能を持つ動物には可能だ。これらもまた記述の問いに含めることができる¹⁴⁾。

記述の問いは極めて多様であり、常に新しい問いが生産され続けている。例えばある人物を記述する問いは、身長、体重、年齢、性別といった基本的なものから、職業、学歴、収入、財産といった社会的な属性、続柄、所属グループといった人間関係、性格や能力、容姿や服装、そして、「キャラ」といった新しい問いも生み出されている。モノについて記述する問いは、数学や物理学の用語を思い浮かべれば、長さ、面積、質量、電流、電圧、pHなど、いくらでもあるし、生物学や地学などでは「～の種類」という言葉（植物の種類、動物の種類、岩石の種類、雲の種類など）が問いの語彙として機能している。また、社会的事実についての問いも非常に多様で、例えば経済の状態を示す様々な指数を思い浮かべれば、その多様性が理解できるし、社会的評価については、政策や政党の評価、スポーツ選手やチーム、アイドルなどの人気、飲食店や宿泊施設などの評判など、これまた十分に多様であることが分かるだろう。

このような記述の問いを基本的な問いとして、これに2つの系列（社会的な問いの系列と二次的な問いの系列）が関わることによってさらに問いが多様化し、それらすべての問いを縦断する形で心の問いと世界の問いという区別がなされる、というのが類型化の構想だ。

社会的な問いの系列

人間の問いは、記述の問いから出発して多様な問いを生み出し、非常に複雑な問いの世界を作り出しているが、その最も重要な契機は人間が問いを共有するからだ。

私たちは個人として記述の問いを立て、それに答えようとするだけでなく、他者から答えを得ようとしたり、他者と協力して答えを見つけ出そうとしたりする。そして、そのようにして見出された答えを共有し、推論に活用しようとする。このようないとなみが、複雑な問いの体系を形作ってきた。そこで、問いの種類の1つとして、「社会的な問いの系列」を提案したいと思う。ここに含まれるのは、主張と意見、根拠と理由などだ。

ここで「系列」という言葉を使ったのは、これらの問いが論理的につながっているからだ。事実を明らかにしようとして、「主張」が問われ、その主張を確認するために「根拠」が問われる。社会的評価や組織の方針を決めるために、「意見」が問われ、その意見を確認するために「理由」が問われる。つまり、これらの問いが互いに上位／下位の関係にあるのだが、それでは、最上位にある問い、つまりスタートとゴールにあたる問いは何かというと、それは記述の問い、つまり事実と（社会的）評価ということになるだろう。事実は何か（どのような社会的評価が妥当か）という問いから出発し、主張や意見、根拠や理由の問いを経て、最終的な結論として、事実是这样である（このような社会的評価が妥当である）といった結論に至るわけだ。その意味では、記述の問いは基本的であると同時に最上位の問いであり、推論のスタートでもゴールでもあるということになる¹⁹⁾。

社会的に共有された答えの一部は記録され、さらに多くの人に共有されるようになる。それらは書物の形で保管されたり、現在ではネット上に情報として記録されたりして、人々はそれらにアクセスすることによって、（社会的な）答えを得ることができる。私たちは、直接的な観察では答えを得ることができない問いの大部分を、書物やインターネットや専門家から得ようとするが、それはその問いがすでに社会的に問われ、答えが共有されているからだ。

二次的な問いの系列

記述の問いを最上位とする問いの系列はもう1つある。それは二次的な問いの系列だ。

二次的な問いとは、前稿において「メタ質問」という言葉で説明した問いであり、前稿では「問い（と答え）に言及する問い」だと説明している（佐藤 2022: 67）。例えば、「あなたは食後に何を飲むか」と問われて、「コーヒーを飲む」と答えたとき、その問いと質問に対して「それはなぜか」（正確には「あなたが食後にコーヒーを飲むのはなぜか」）と問えば、それが二次的な問いだ。

二次的な問いとして最も重要なものが、「なぜ」の問いだ。「なぜ」の問いのうち、推論の問い（根拠と理由）については、社会的な問いの系列ですでに扱っているが、これらは社会的な問い以外でも用いられる。例えば、あなたが目の前にある物は何だろうと考えて、直感的にある答えを得たが、その答えが本当に正しいかどうかを確認するために、その答えの根拠は何かを考え

るかもしれない。このように、事実の問いを最上位として、そこから根拠が問われ、根拠を確認したうえで事実の問いに戻って最終的な答えを与える、という論理的な流れが確認できる。

では、「なぜ」の問いのうちのもう片方、つまり説明の問いについての論理的な流れはどうなっているだろうか。この問いに答えるには、私たちはなぜ原因や理由を問うのかを考えなくてはならない。

何らかの出来事が生じたとき、私たちはその原因を問うことがあるが、それはなぜだろうか。「出来事が生じた」こと自体に疑いの余地がある場合はその根拠を問うだろうが、原因を問う場合は、それ（出来事が生じたこと）は正しいことが前提になっている。そのため、原因が分かったとしても、それが元の事実の問いに何か影響を与えることはない。ということは、事実の問いが推論のゴールではなく、説明の問いそれ自体が最終的な目標なのだろうか。

例えば、何らかの機械が故障し、その原因を突き止めたとしよう。この時、原因の問いに答えることは、その機械の状態を問う事実の問いには確かに影響を与えない。しかし、原因となる同じ要素を持つ別の機械がこれから故障するかどうかを問う問いに答えるためには役に立つ。これから故障するかどうかというのは予想の問いであり、すでに述べたように予想の問いもまた記述の問いの一部である。

こう考えれば、原因の問いもまた、記述の問いをスタートとして、記述の問いに戻る論理的な流れの中にある。ただ、推論の問いが元の問いと同じ問いに戻るのに対して、原因の問いは別の記述の問い（予想の問い）がゴールとなるのだ。

それでは、理由の問いについてはどうだろうか。説明の問いとしての理由の問いは、原因の問いと同様に予想の問いにつながる場合がある。例えばある人が誰かを殴り、その理由が分かったなら、これからどんな場合にその人が誰かを殴るのかを予想できるかもしれない。

しかし、理由の問いと記述の問いとのつながりはそれだけではない。例えば刑事裁判では被告人に犯行の理由（動機）を問う。それは予想のためとも言えなくはないが、それ以上に、犯行がどの程度悪質なのか、あるいは情状酌量の余地があるのかを判断するため、つまり評価のためだろう。これは裁判だけではなく、私たちは他者の行為をどのような受け止めてよいのか判断しかねる場合に、理由を尋ねることは珍しいことではない。このように、事実の問いから理由の問いを経て評価の問いへと至る、論理的なつながりが考えられる。つまり、理由の問いをめぐる論理的な流れも、記述の問いがスタートかつゴールとなっているのだ。

以上のように、二次的な問いの系列においても、すべての問いは記述の問いから出発して最終的に記述の問いへと戻る論理的な流れに位置づけられることが分かる。

問いの類型モデル

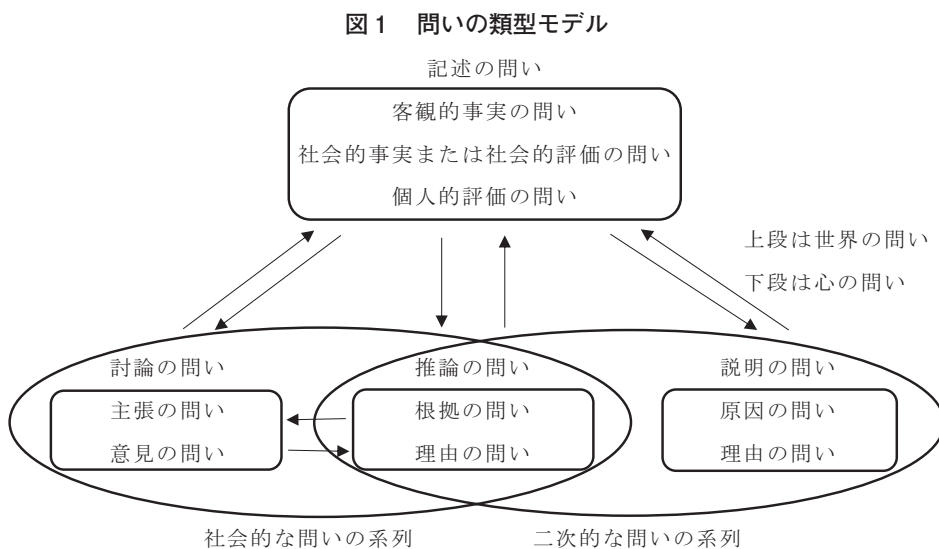
それでは、これまでの議論をまとめてみよう。

これまでに扱ってきた問いは、記述の問い、社会的な問いの系列、二次的な問いの系列に分類できる。ただし、推論の問いについては、社会的な問いの系列にも二次的な問いの系列にも含まれている。記述の問いと社会的な問いの系列、記述の問いの二次的な問いの系列、そして主張及び意見の問いと推論の問いの間には、論理的な関係がある。そして最後に、（客観的）事実の問い、主張の問い、根拠の問い、原因の問いは世界の問いとして、（個人的）評価の問い、意見の問い、理由の問いは心の問いとして、区別する必要がある¹⁶⁾。

以上のことを表現したものが図1である。この図はまだまだ問いの世界の全体像をとらえたものであるとは言い難い、暫定的なものだが、その核心的な部分については、それなりに表現できているのではないかと思う。

私としてはこの図が、これから問いの世界の探求が行われる際の最初の案内図として活用されることを望んでいる。言うまでもないことだが、私たちはこれまで取り上げたもの以外にも多種多様な問いを知っているし、日常的に問い、問われている。それらの問いは、この図のどこに位置づけられるのか、あるいはこの図を何らかの形で拡張したり修正したりしなくてはならないのが検討されれば、問いについての探求が効率的に進められるのではないかと思う。

実は私自身にも、これまでに言及したものの以外に、この図に加えるべき、あるいはどう扱うかを検討中としている問いがいくつもある。次のセクションではそれらについて簡単に説明をしておきたい。



4) その他の問い

確認の問い

推論の問い（根拠と理由）の説明では、主張が正しいかどうかを確認するために根拠が問われるとか、事実が本当に正しいかどうかを確認するために根拠が何かを調べるといった説明をしたが、よく考えればこれらの表現の中の「確認」も問いの種類の1つだと考えられる。

ある主張がなされたとき、まず問われるのはその主張が正しいのかそうでないのかということだろう。これを確認の問いだとすれば、主張の問いから根拠の問いという流れは、確認の問いが媒介していることになる。なぜなら、「正しいかどうか」という疑問が出なければ根拠を問う必要はないのだから。

もし確認の問いが、事実や主張などの問いと推論の問いとを媒介するだけの役割しか持たないのであれば、それほど重視する必要はないのだが、必ずしもそうとは限らず、むしろ確認の問いは問いの世界において他のすべての問いとは異なる、極めて重要な特徴を持っていると私は考えている。

確認の問いが重要なのは、その問いが無制限に用いられることによって、推論の無限後退を引き起こすからだ。ある主張に対して「それは本当か」と問い（確認の問い）、その問いに答えるために根拠が問われたとする。このとき、もしある根拠が答えとして得られたとしても、今度はその根拠に対して「それは本当か」と問うことができる。これを繰り返せば、決して終わることのない無限後退が生じてしまう。

このため、確認の問いの扱いには注意が必要だ。無限後退に陥らないための現実的な解決法の1つは、確認の問いに対して根拠の問い以外の方法で答えることだ。例えば「それは本当か」という問いに対して根拠を問おうとするのではなく、「この人の言うことは信頼できるのか」（信頼の問い）で解決しようとする方法もある。実際多くの確認の問いはこのように解決されているはずだ。

以上のようなことから、確認の問いは単に事実や主張の問いと推論の問いを媒介するものではなく、独自に考察が必要な重要な問いであることが分かると思う。

確認の問いを図1に含めなかったのは、推論の問いとの関係が複雑なので、すっきりとした形で図示できなかつたからだが、今後はどのように扱うのか検討が必要だと思う¹⁷⁾。

名前の問い

「これは何か」とか「〇〇することを何というのか」といった問いを、名前の問いと呼びたいと思う。名前の問いは非常に基本的な問いのように思えるかもしれないが、社会的な問いの系列に属すると私は考えている。それは、私たちはなぜ名前を問うのかを考えればわかる。

私たちが名前を問うて答えを得ても、その答え自体には何の意味もない。これは何かと問う

て「リング」だという答えが分かっても、それだけで何かが分かるわけではない。それでもなお私たちが名前を問うのは、名前が蓄積された知識を検索するためのインデックスであるからだ。目の前のものの名前がリングだと分かれば、私たちはリングという言葉に結び付けられた知識を利用することができる。それが果物であるとか、食べると甘い味がするとか、日本では青森県や長野県で多く収穫されるとか。そういった知識はもちろん、社会的に問われて答えが共有されたものだ。また、リングという言葉を知れば、リングに関わる社会的な問いに参加することができるようになる。一番おいしいリングの食べ方について意見を述べることができたり、リングは果物の王様だと主張できたりするのだ。

このように、名前の問いは、いわば社会的な問いに参加する資格を得るための問いだということもできる。社会的な問いは図1にあげた、主張と意見、根拠と理由だけに限られるのではなく、名前の問いもそこに含まれるし、これ以外にもまだ重要な問いが見過ごされているかもしれない。

行為に関係する問い

私は行為選択自体を問いであるとは考えていない。例えば家に帰ろうと思って、どの交通手段を使うのかを考えるのは、確かに問いとしての形をしているが、これは「行為」ということなみの一部¹⁸⁾であって、本書で扱う問いの範疇には入らないと考えている。

しかし、社会的な問いを意識すれば、行為選択を問いとして扱う必要があるとも考えられる。例えばある集団がこれから何をするのかを決めること、集団的な意思決定は、社会的な問いとしての形を明確に持っている。集団的意思決定の中では、意見や主張が問われ、それらに対する根拠や理由もまた問われるからだ。

ただ、このような問いを図1の中でどのように位置づけるのかは非常に難しく、私もまだ結論を出せていない。今のところは、図1とは別に、行為選択の問い（方針の問い）を中心とする社会的な問いの系列を想定する必要があるのではないかと考えているが、もう少し検討させていただきたい。

方法の問い

「どのように」という問いは、多くの場合は事実の問いだと考えられる。例えば「事故がどのように生じたのか」とか「積乱雲はどのように発達していくのか」という問いは、客観的な事実関係を明らかにしようとしている。

しかし、ある種の「どのように」は、純粋に事実の問いであるとは言い難い。それは「あなたは部屋をどのように掃除しているのか」といった問いだ。

この問いは、事実の記述を要求している場合もあるが、どうすればもっと効率よく、きれい

に掃除ができるだろうかと考えている人が、掃除の上手な人に尋ねていると考えれば、ただ単に事実関係を知りたいのではなく、例えばどういう場合ならどうするのかといった判断基準や、心構えや“コツ”といったことを知りたいのかもしれない。そのようなことを意識した問いであれば、それを事実の問い（記述の問い）であると考えるのは無理があるだろう。

私はこのような問いを方法の問いと呼んでいるが、この問いもまた、図1の範囲に位置づけることは難しい。それはこれもまた行為に関係する問いだからだ。上の行為選択の問いと合わせて、今後の検討課題とさせていただきたい。

4. 問答論的知識社会学—説明の問いを題材に

1) 問答論という視点

それでは最後に、本稿の最後の目的である問答論的知識社会学の提案を行いたい。

問答論的な考え方では、すべての知識は何らかの問いに対する答えである。問いが無ければ答えである知識は存在しない。つまり、問いが知識を生み出しているのだ。そのため、ある知識が（社会的に）どのような意味を持つのかを明らかにするためには、その知識を生み出した問いについて考える必要がある。

「問いについての考察」は、これまでは十分な取り組みがなされてこなかったが、前稿で提案した問いの基礎理論は、問いについて体系的な考察する道を切り開いた。特に「問いの語彙」という概念は考察の対象を明確にし、問いが答えの選択であるという考え方や問いと問いの論理的な関係を表す「上流／下流」といった概念は、問いの意味を明確にするための足掛かりになる。さらに本稿では、社会的な問いという概念を導入して問いについての社会学的考察を可能にし、問いの類型化についてある程度の枠組みを示すことによって、問いについて考察するための道筋をより明確にした。

本稿で提唱する問答論的知識社会学は、以上のような理論枠組みに基づくものだが、実はこれまでの社会学の中にも、本稿で説明したような言葉は用いていないものの、事実上問答論的だと考えることができる社会理論が存在する。それは社会問題の構築主義だ。そこで、問答論的知識社会学のイメージを明確にするために、本稿の立場から構築主義について簡単に論じておきたいと思う。

社会問題の構築主義は、社会問題を「社会的に構築される」ものだと捉え、その過程を明らかにしようとする。この「構築」という言葉をめぐっては、それが反実在論を意味するのではないかという疑念を招き、活発な議論がなされてきた。

構築という言葉は、ある状況が「社会問題である」という「事実」が社会的なプロセスによって「作られる」（＝構築される）という意味だが、このときの「事実」の存在論的な身分をめぐって、意見が交わされてきたのだと言える。しかし、本書の立場からは、「社会問題」というのは、「事実」なのではなく「問い」であると捉えなくてはならない。つまり、「社会問題」は問いの語彙なのだ。

本稿の前提になっている、平叙文で表すことができるあらゆる言明は何らかの問いに対する答えである、という考え方を適用すれば、「〇〇という状態は社会問題である」という言明は、「〇〇という状態は社会問題なのか」という問いと、それに対する肯定的な答えが組み合わされたものだ。この（社会問題という）問いは、私たちにとって重要な「社会的な問い」であり、なおかつその答えを得るためのプロセスは、十分に制度化されておらず、非常に複雑である。そのため、社会問題は、問いとしての探求の対象になるのだ。

構築主義の主要な理論的概念の1つが「クレーム申し立て」だが、本稿の立場では、それはクレームという主張ではなく、「社会問題であることの根拠（あるいは理由）の問い」に対する答えであると位置づけなくてはならない。もちろん、そんな問いは実在しないことの方が多いのだが、クレームは根拠の問いを「先取り¹⁹⁾」したものであると捉えることによって、はじめてその論理的な位置づけが明確になるのだ。

このように、問答論的な視点は、しばしば先取りされている問いを補うことによって、様々な主張の論理的な位置づけを明らかにし、社会的な問いをめぐる状況の整理を可能にする。

もちろん、社会問題という問いに答える社会的なプロセスは、言論だけにとどまるものではない。デモや集会を行ったり、署名を集めたり、SNSでメッセージを拡散したりといった、直接的な行動もまた行われる。問答論的に考えるということはこれらもまた、問いと答えという枠組みの中で理解するということだ。例えば、社会問題という問いの下位の問い（社会問題かどうかという問いに答えるために立てられる問い）として、「どれくらいの人が賛同しているのか」などの問いを想定し、それを先取りするからこそ、これらの行動が行われると考えることができる。

このように考えてみると、「構築」という、存在論的な方向にミスリードしかねない言葉ではなく、よりシンプルに、「社会的な問い」に関わるプロセスだと考えたほうが、生産的な議論ができるのではないだろうか。また、同様の考え方は、社会問題だけでなくかなり広い範囲に応用可能であるはずだ²⁰⁾。

2) 社会科学と説明の問い（試論）

それでは、本稿を締めくくるにあたり、問答論的知識社会学の応用例として、社会科学の説明とはどのようなものかを考えてみたい。科学というとなみは、いうまでもなく「社会的な

問い」だ。社会から与えられた、あるいは自ら見出した問いを研究者たちは共有し、互いの主張や根拠を問いながら、共有できる答えを得ようと努力する。それではその問いはどのようなものなのか。

まず、考察の対象を少し限定したい。科学を記述科学と説明科学に分類するという考え方があるが、本稿の考え方を適用すれば、科学は記述の問いと説明の問いを含んでいると言い換えてよいだろう。社会科学にもまた、記述的な部分と説明的な部分がある。この2種類の問いのうち、本稿では説明的な部分、つまり説明の問いを取り上げる。これは、記述の問いが非常に多様であり、簡単に論じることができないことと、説明の問いの方が社会科学の特徴がより鮮明に現れると考えているためだ。

社会科学と2種類の説明

議論の出発点とするのは、第3節で説明した2種類の説明の問い、すなわち、原因の問いと理由の問いだ。社会科学の説明は、このうちのいずれかによるものか、もしくは両方の説明が使われているのだろうか。

社会科学の説明を考える前に、比較の対象として自然科学の説明について簡単に触れておこう。自然科学の説明は原因の問いによる説明であり、理由の問いによる説明は全く存在しない。例えば地球上で物体が落下するのはなぜかと問う場合、それは原因の問いであって理由の問いではない。「物体が落下する理由」という表現が違和感をもたらすことからそれは確認できるだろう。

科学に限らなければ、自然現象を理由で説明すること自体は、ないわけではない。例えば、自然災害を「神の怒り」と説明するのは、理由による説明にあたる。これは、理由を問うことは何らかの意思の存在を想定しなくてはならず、そのために「神」などの超越的な存在を持ち出さざるを得ないからだ。逆に言えば、自然科学はそのような意思の介在を否定する。つまり理由による説明を拒絶することによって自然科学が成立しているのだ。

それでは、社会科学の場合はどうだろうか。社会科学もまた、原因を問うことがある。貧富の格差が拡大した「原因」を特定しようとしたり、犯罪が増加したり減少したりする「原因」にも関心を持ったりするだろう。しかし、社会は人間の意志によってつくられる部分も否定できないので、社会科学は理由を問うこともある。

例えば、交通渋滞はなぜ起こるのかという説明の問いは、原因を問うのであれば、交通量の増加や道路の整備状況などが候補に挙がるだろう。しかし、さらにさかのぼって交通量の増加を説明しようとするれば、電車ではなく車で通勤する「理由」とか、年末年始に帰省する「理由」などを問う必要が出て来る。

以上のように、社会科学では説明をする際に原因の問いと理由の問いの両方を用いるのだが、それでは、社会科学にとってこの2種類の問いはどのような意味を持つのだろうか。

このことを考えるために、理由の問いまたは原因の問いのいずれかだけでは社会科学の説明として不十分であるかどうかを検討したい。

まず、社会現象は理由の問いだけで説明が可能なのかを考えてみよう。これは、いわゆる「意図せざる結果」の存在によって簡単に否定できる。社会を構成する一人一人の行為は理由の問いによって説明が可能かもしれないが、それらが集まって生じる社会現象は、必ずしも人々の意図にかなったものであるとは限らないからだ。この場合、人々の行為についての説明は「理由」であるが、社会現象は人々の行為を「原因」として説明される²¹⁾と考えることができる。

意図せざる結果は、社会科学において特に重視される考え方であり、社会科学の哲学を研究する立場からは、それを説明することが「社会科学の主要な目的の1つ」（吉田、2021:211）とみなされることもある。ということは、原因の問いの探求（意図せざる結果の説明）こそが、社会科学の主要な目的ということになるだろうか。

では逆に、社会現象は原因の問いだけで説明が可能かどうかを考えてみよう。この論点については、理由もまた原因の一種だという、主として分析哲学における考え方²²⁾があるが、本稿における理由や原因は、何らかの観念のようなものではなく、「問い」であることに留意いただきたい。理由は原因の一種なのかという問いと、理由の問いは原因の問いの一種なのかという問いは全く異なる問いなのだ。

では改めて、原因の問いだけで説明が可能かどうかを、原因の問いの代表格だと考えられる統計的な分析を例にして考えてみよう。

ある態度や嗜好（例えば動物が好きかどうか）と行動（ペットを飼育しているかどうか）との間に十分な相関関係が認められたとき、分析者はその関係を因果関係と認め、動物が好きかどうかをペット飼育の「原因」とするだろうか。おそらくそれは、相関関係が正の相関であるか負の相関であるかによって異なると思われる。

もし正の相関、つまり動物が好きなら人ほどペットを飼育しているということであれば、動物好きであることを原因と認めるかもしれないが、負の相関、つまり動物が嫌いな人ほどペットを飼育しているという結果がもし出たとすれば、動物嫌いをペット飼育の原因とは認めないのではないだろうか。なぜなら、それはその相関関係が「説明がつかない」からだ。

「説明がつかない」相関関係は因果関係であるとは認められない。その場合の「説明」とは、明らかに理由の問いだ。ペットを飼育するという行動の説明として、「動物が好き」であることは「理由」になりえる、つまり妥当な推論として認められるが、「動物が嫌い」だから「ペッ

トを飼う」という推論は妥当だと考えられないため、理由にはならず、そのために「説明がつかない」のだ²³⁾。

一般的に言って、社会科学の研究によって明らかになった「原因」は、最終的にそのメカニズムを「理由」によって説明することができなければ受け入れられない。これは意図せざる結果についても同様だ。意図せざる結果が生じる仕組みは、私たちがどんな場合にどう行動するのかという「理由による説明」を必要としている。例えばみんなが渋滞を避けようとして高速道路を避けると、そのことによって一般道が混雑してしまうというのは意図せざる結果だが、これが意図せざる結果であると言えるのは、みんなが一般道を選んだのは渋滞を避けるためだという「理由による説明」が受け入れられる場合に限られる。つまり、社会科学における原因の問いは、理由の問いに依存しているのだ。

社会科学が原因の問いの探求を主要な目的としているのであれば、(原因の問いの追求である)自然科学と社会科学の違いは小さなものだと考えられる。しかし、その原因の問いは、社会科学の場合最終的には理由の問いに依存している。この点は、自然科学と社会科学の重要な違いだと見なすことができるだろう。

そこで、原因の問いと理由の問いの違いをもう少し掘り下げて考えてみようと思う。そのために用いる方法は、ブランダムが提唱する「推論的意味論」²⁴⁾という考え方をうたいたいと思う。これは、ある言明(ブランダムによれば主張)の意味は、そこから論理的に導かれる主張や、それを論理的に根拠づける主張によって理解できる、ということだ。この考え方を援用すれば²⁵⁾、原因の問いと理由の問いの違いは、それぞれの上位の問い、下位の問いを調べることによってわかるはずだ。

そこで、説明の問いの上位の問いと下位の問いのそれぞれについて考えてみたい。

説明の上位の問い

説明の問いの上位の問いとは、どのような問いの中で説明が問われるのか、ということだ。直感的に理解しやすい言葉で表現すれば、説明の目的は何か、という捉え方でもよい。

自然科学の場合は、説明の問いは原因の問いであり、第3節で説明したようにその上位にあたるのは予想の問いだ。ある事象Aの原因が事象Bであることが分かれば、次に事象Bが生じているときには事象Aが生じると予想できる。これが基本的に原因による説明のロジックだと言ってよいだろう。

では理由による説明を行う場合はどうだろうか。これも第3節で説明したが、理由の問いは予想の問いにも結び付くがそれだけではなく評価の問いにも結び付く。私たちは他者の行為を評価するためにその理由を問うことがあるのだ。

これを社会科学に当てはめてみると、社会科学においても理由による説明から何らかの予想を行うことはあるかもしれない。例えば犯罪とされる行為を行う理由に経済的な困窮があるとすれば、社会全体の経済状態が悪化することによって犯罪が増加すると予想することができるだろう。

ただ、社会科学の場合はこの予想は非常に不安定だ。例えば経済状態の悪化に伴って犯罪の増加が予想されるなら、あらかじめ取り締まりを強化することによって、犯罪（検挙数）は増加するかもしれないし、逆に取り締まりの強化を感じた人たちが犯罪となる行為を抑制して、実際の犯罪数が減少するかもしれない。いわゆる予言の自己実現や自己破壊が起りえるのだ。

このようなことが起こるのは、社会現象の場合は予想から行為へのフィードバックが生じる可能性があるため、逆に言えば自然現象の場合はこのようなことは生じない。

それでは、予想から評価というつながりについてはどうだろうか。第3節では裁判の例を挙げ、犯罪の動機（理由）を明らかにすることによってその行為を評価すると説明した。ではさらに、行為を評価するのはなぜなのかを考えてみよう。裁判の場合は、責任を問うためだと考えることができる。そして、責任を問うことによって、その行為自体を抑制したり許容したりする。つまり、最終的には行為のコントロールに行きつくのだ。

社会科学は裁判と同じではないが、やはり理由から評価の問いに結び付けることはある。例えば、いじめに加担するのはなぜかと問い、「いじめに加わらないと自分がいじめられるから」という理由が得られとしよう。その場合私たちはこの理由をただ単に「事実」として受け入れることはない。そのような理由でいじめに加担することを理解しつつも、なんとかしてそれをやめさせなくてはならないと思うはずだ。そうしなければいじめはなくなるのだから。つまりその理由を否定的に評価しているのだ。

ではなぜ私たちは理由を評価するのだろうか。それは、理由が心の問いであることと関係している。第3節では、心の問いが個別的で多様性を持つことを明らかにしたが、それはつまり、理由は「他のあり方があり得る」もの、言い換えるならそれ自体が「変数」であるということだ。

同じように自分がいじめられることを恐れる子が、ある子は「いじめられないように」という理由でいじめに加わり、別の子は「いじめられないように」いじめ自体をなくすように働きかける、という判断をするかもしれない。このように、理由は変数であるがゆえに、そこに介入する余地があり、だからこそ評価をする必要があるのだ²⁶。

なお、理由はそれ自体が変数であるというのは、理由による予想にも大きな影響を持つ。つまり正確な予想のためには（変数である）個々人の理由を正確に把握する必要があるということだ²⁷。

以上の議論をまとめると、理由の問いと上位の問いとの関係は、1つには不安定ながらも予

想へとつなげるといふ道筋と、理由の評価から（変数である）理由への介入といふ道筋がある、ということだ。この両者のうち、社会科学の役割としては、どちらを重視すべきなのか、あるいは両方とも等しく重要なのかは、もう少し後で議論をしたい。

説明の下位の問い

説明の問いの下位の問いとは、説明をするためにどのような問いが立てられるのか、ということだ。いま議論をしているのは科学であるため、単に答えるだけではなく、その答えがどれほど確実なのかを調べることも要求される。そのため、ここでの議論は答えを出すための問いと答えを確認するための問いの両方を扱いたい。

まず、答えを出すための問いだが、原因の場合は比較という問いが立てられる。ある事象Aが存在する場合には事象Bが生じ、なおかつある事象Aが存在しない場合に事象Bが生じなければ、事象Aは事象Bの原因だということになる。厳密に言えばもう少し詳しい説明が必要だが²⁸⁾、比較という問いが立てられること自体は間違いない。これが原因の問いのロジックだ。

ただし、社会科学の場合には先述したように、原因を問う際にも最終的には理由の問いが立てられる（場合がある）。そのため、比較だけで原因の問いに答えを出せるとは限らない。

では理由の場合はどうだろうか、私たちはどうやって理由を知るのだろうか。理由は心の問いであるので、基本的には自らの心をのぞき込むことによって明らかにする。そして、他者の理由についてはそれを語ってもらうしかない。つまり質問という方法をとる必要があるということだ。このため、社会科学においては、「質問」が調査方法の主要な要素になる。質問紙調査も、インタビューも、量的と質的という違いがあっても、質問であるという点では違いがない。

また、実際には質問だけではなく、観察による推測も併用される。人の行動などを観察し、そこから理由を読み取ることは社会科学でも（暗黙のうちに）行われている。ただ、理由そのものは直接観察することができないので、行っているのはあくまでも推測だ。

それでは、答えを確認するための問いはどのようなものだろうか。原因の問いの場合、比較によって違いが見つかったとして、その違いがどれほど確実なものなのかをどうやって判断するだろうか。素朴な考え方としてはデータの量（ケース数）が問われるだろう。数件のデータから違いが見つかったとしても、それがどれほど確実なものなのかは怪しいかもしれない。ケース数が多ければ多いほど、そこから得られる結論は確実なものだと扱われる。この考え方をさらに精緻にしたものが、統計的検定だ。実際に得られた違いが偶然見出される確率を計算し、その確率が十分に低ければ、その違いは偶然ではなく意味のあるものだと判断する。このようなロジックで比較結果が確認される。

それでは理由の場合はどうやって確認するのだろうか。ある人から行為の理由を聞きだしたとき、それが本当であるかどうかを、どうやって確かめるのか。理由は個別的なものなので（理由は人それぞれだ）、他の人に理由を尋ねても、特定の人から聞き出した理由が確実になるわけではない²⁹⁾。そのため、理由の場合は原因とは全く異なる方法での確認が必要になる。

その方法の1つは、信頼の問いだ。ある人に対する質問の答えが信用できるかどうかを、その人との信頼関係によって判断する。インタビューであれば、いわゆる「ラポール（調査者と被調査者との間の信頼関係）」を築き、それが良好であることによって、理由の問いに対する答えの信頼性を担保するし、質問紙調査であれば、明らかに真面目に答えていないと思われる回答（例えばすべての質問の1番目の選択肢に○がついているなど）をデータから除外したりする。

もう1つの方法は、理解の問いだ。見出された理由が、なるほどと納得できるものなのか、あるいは、どういう考え方をすればそんな結論になるのか分からないようなものなのかを、自ら³⁰⁾の感覚で判断する。

もう少し詳しく説明すれば、理解できるかどうかは、まず合理的な判断として成立するかどうか問われる。お金を節約したいと思っていて、ある商品をそれが相対的に安いという理由で選んだというなら、それはもちろん合理的だろう。しかし、合理的ではなくても、ある種の思い込みなどを織り込めば「理解できる」場合はある。例えば、ある集団に属する人のうちの一人だけが気に入らないからと言って、その集団全体を嫌うのは合理的ではないが、それはあり得ることだとして「理解できる」。この場合は、「なるほど」というよりは「そういうこともあるのだろうか」というニュアンスの理解だろう。

このように説明すると、何やらざん判断をしているようだが、実際に行われていることだし、これ（信頼と理解）以外に理由を確認する方法はない。

このように原因の問いと理由の問いを比べてみると、世界の問いであり、客観的事実を比較し、統計的検定によって確実性を担保できる原因の問いに対して、心の問いであるがゆえに、質問に頼らざるを得ず、信頼や理解というロジックでしか確実性を担保できない理由の問いは、構造的な不安定性を抱えていると言わざるを得ない。

社会科学の説明

以上の考察から、暫定的な結論を導いてみたい。

まず明らかにしたことは、社会科学は自然科学とは異なる独自の困難を抱えているということだ。社会科学は原因の問いと理由の問いの両方を必ず必要としており、特に原因を問う際にも理由の問いが必要になることは重要だ。そして、理由の問いは、原因の問いとは異なる構造

的な不安定性を抱えている。理由は観察による推測や質問という(自然科学の観測と比べれば)不安定な方法を用いざるを得ず、さらに社会現象についての予想は、予想結果が理由や行為にフィードバックしてしまうことが予想を不安定にしてしまう。

このような困難をふまえて、社会科学はどのような説明をしているのか、あるいはどのような説明をするべきなのだろうか。

まず1つは、理由による説明をできるだけ回避し、極力原因の問いだけで説明を行おうとする方法だ。つまり、ある人がなぜこのような行動をしたのかといった、理由による説明には頼らず、純粹に比較という方法だけで社会現象を説明しようとするのだ。

この方法は、比較のために必要な大量のデータを質問に頼らずに収集することが必要なので、現実的には難しかったのだが、近年はいわゆるビッグデータの活用によって、様々な調査・研究が行われるようになってきた。例えば、スマートフォンの位置データなど、人々の行動を表すデータが大量に入手できるようになり、それらを用いた統計的分析が実際に行われている。

また、人々の発言(特にネット上の)を、理由の問いに対する答えを得るために利用するのではなく、比較という手法によって原因の問いの文脈で理解する方法も用いられる。例えば、「ウイルスは怖い」という発言と「マスクをするべきだ」という発言が同じ人から現れる傾向があるとき、前者を後者の「理由」として理解するのではなく、統計的な相関関係にのみ注目する。そうすることによって、「理解」という(少なくとも現状では)人間にしか行うことができない³¹⁾判断を排除し、コンピュータによって大量のデータを機械的に分析することが可能になるというわけだ。

このような手法は、記述の問い(に答える方法)としては十分に有効だが、説明の問いとして考えるなら、大きな問題を抱えている。

まず、この説明から得られる予想が、十分な精度を持たない可能性があるということだ。すでに説明したように、人々の行動はその行動からどういう結果が予想できるのかということから影響を受ける(フィードバックの回路がある)。そのため、予想を公表したために予想が外れたり、予想通りの結果になったとしてもそれは予想が当たったということなのか、予想したことが原因で予想通りになったのかを区別できなかったりする。このようなことから、単純に予想というだけであれば、十分な精度を得られない。

例えば、渋滞の予想が大量のデータや精緻な予測モデルによって技術的に可能になったとしても、予想結果を公表すればそれが人々の行動に影響を与えてしまうため、予想通りにならないことがあるのは想像に難くないだろう。そのため、(皮肉なことに)渋滞予想は人びとに利用されればされるほど、予想は当たりにくくなると考えられる。

もう1つの問題は、理由の問いを排除しているがゆえに、評価ができないことだ。すでに説

明したように、理由はそれ自体が「変数」であり、その理由を評価して変化させるべきだと判断できれば、そこに介入して現状を変えようとするができる。例えば上の渋滞予想であれば、ある時間に交通量が增大する「理由」を明らかにし、その理由のいくつかは変化させることができることが分かれば、その部分に対するアプローチが可能になる。もし、ある場所のある時間帯に生じる現象が「SNS映える」ことが交通量増大の理由の1つなら、その理由で行動する人に対するアプローチが有効かもしれない。「理由」を説明から排除すれば、このような介入は不可能だ。

以上のことから私は、理由による説明を回避する方法は、完全には否定しないものの、その有用性はかなり限られてしまうと考えている。

もう1つは、理由の問いを積極的に活用し、理由を評価することを主たる目的とする方法だ。この場合、予想ももちろん行いが、その予想は評価のための予想だ。

例えば、渋滞について考えるなら、まずどのような行動が渋滞をもたらすのかを予想し（ここまでは1つ目の方法と同じ）、さらにその行動の「理由」を調べる。理由は多様だが、それらをやむを得ない理由や変更可能な理由、認めることができない理由などに切り分ける（評価する）。このように、理由の問いに踏み込むことによって、始めて社会現象に対する積極的なアプローチは可能になるのだ。

もともと理由の問いに基づいて行われているインタビュー調査による探求が、こちらに属することはもちろんだし、アンケート調査を統計的に分析するような探求も、ただ相関関係があるというだけで結論を出すのではなく、その相関関係がいかなる理由を示すのかをしっかりと考えるのであれば、こちらの方法にあたるだろう。

しかし、すでに説明したように、理由の問いには独特の困難さがある。観察からの推測や質問といった、不確かな方法に頼らざるを得ず、しかもそれを確認するのも、信頼や理解というこれまた漠然とした問いだ。それでもなお、理由の問いこそが社会科学の生命線であると考えるのであれば、社会科学に携わる者は、質問や観察の技術、理由を推測する想像力、信頼関係を築いて他者を理解する技術を磨くしかないのではないか。だからこそ、社会学は、「理解」や「社会学的想像力」を強調してきたのだろう。

以上のように、私の結論は、たとえ不確かな問いであっても理由の問いこそが（説明科学としての）社会科学の核心である、というものだ。

ただし、実はまだ残された問題がある。それは、理由を「評価」するということが、いかにして可能なのか、という問題だ。評価をするには当然その基準が必要だが、その基準をどのように設定すればよいのか。この論点も、社会科学のあり方についてその成立当初から議論され

てきた問題だ。

この論点についても私は答えを用意しているが、本稿ではとても扱う余裕がない。近刊予定の佐藤 2023 を見ていただきたい。

おわりに

それでは最後に、本稿の主張を整理しておこう。本稿も（前稿と同様に）その主張は極めてシンプルだ。本稿の主張は大きく分けて次の2つに整理できる。

まず1つ目は、問いは以下の3つの要素によって類型化できる、という主張だ。

1. 社会的な問いと個人的な問い
2. 心の問いと世界の問い
3. 記述の問いと二次的な問い

2つ目は、(社会的な)知識は問答論的視点によって分析することができる、という主張だ。本稿ではこれを問答論的知識社会学と命名し、その事例として、社会科学における説明の問いについて考察した。

ただ、問いの類型にしても、問答論的知識社会学にしても、まだ決して十分な枠組みを提示できたわけではなく、いわゆる「たたき台」として利用可能な程度の、最初の試みだと位置づけた方が良いと思う。読者の皆様には、ぜひ本稿を十分検討したうえで、より良い理論枠組みを作り出してほしいと願っている。

注

- (1) ただし、「問いの先取り」についても、本稿の議論の一部でその考え方をういている。
- (2) 「問答論」という用語法は、入江 2020 に由来するが、入江は明確な定義を与えているわけではないし、私もまた今のところは、「前稿及び本稿の考え方に基づいた」といった意味合いでういている。
- (3) この言葉は「(他者に対する)質問」に限定されないので、本稿の用語法では「相関する問い」などとすべきだが、前稿での表現なのでそのままういている。
- (4) 前稿では返答文と焦点としての「答え」を区別するため、後者を「<答え>」を表記していたが、本稿ではそのような区別をする必要がないため、単に「答え」と表記する。本稿での「答え」は前稿の「<答え>」に相当すると受け止めていただきたい。なお、「焦点」については前稿(佐藤 2022: 54)を参照してほしい。
- (5) サールはこれ以外に、相手が答えを「知っているか否かということを知る」ための質問として、試験などにおける質問を指摘している。しかしこれは、相手から答えを求める質問がまず成立したうえでの、派生的な質問であり、サール自身も言うように「本来の質問」ではないと本稿では考える (Searle 1969=1986: 125)
- (6) ブランダムによれば、推論は「主張に対して理由を与え求めるゲーム」であり、それは「少なくとも二つの種類の規範的状态、すなわちコミットメントと資格付与、および、それらに関わるいくらかの一般的な構造が認知できるようなもの(傍点を省略)」(Brandom 2000=2016: 260)でなくてはならない。つまり、推論(のゲーム)には主張をすることによる責任や主張をする資格といった規範的な要素があ

- るということだ。
- (7) ここでは扱わないが、質問にはこれ以外に、「心の問い」に関わる質問がある。心の問いについては第3節で説明する。
 - (8) 毒と持つとか爪が鋭く筋力があるといったことは客観的事実だが、「危険」というのはあくまでも人間から見た評価である。
 - (9) 未婚の男女の間に生まれた子と（認知をしない）父親との関係など。
 - (10) Aが「自分はBを好きかどうか」を問うのが個人的評価だが、「AはBを好きかどうか」を第三者が問い、共通の答えを得る必要が生じれば（決着を付けなければならないとすれば）、それは事実の問いになる（客観的事実とするか社会的事実とするかは状況によると思う）。この区別はしっかり理解しておいてほしい。
 - (11) 「主張の根拠」という表現ではなく、「主張する理由」という表現では、主張と理由が対応しているように見えるが、この場合は主張ではなく主張するという行為に理由が対応しているのだと考えられる。
 - (12) 理由による説明は、「推論による説明」だと言うこともできる。
 - (13) もし本人も知らない理由があるとするなら、それは理由というより「原因」と呼ぶべきだろう。
 - (14) つまり、予想の問いも記述の問いの一部だということだ。人間は非常に高度な、そして社会的な推論に基づいて予想を行うこともあるので、それも含めて基本的な問いだというのは違和感があるかもしれないが、答えの妥当性がどのように評価されるか（事実と合致する答えが妥当な答えだ）を考えれば、基本的な問いに分類することが妥当だと思う。
 - (15) 実際には最上位の問いは他にもある。それは実践的推論、つまり何らかの行為を行おうとするなかで生じる選択である。問いという形にすれば、「方針」の問いとか「行為選択」の問いということになるだろう。ただ、これについては問いと行為の関係という難問が関与してしまうので、本稿ではこれ以上追究しない。議論の入り口としては、佐藤 2013 または佐藤 2019b を見てほしい。
 - (16) 社会的事実の問いと社会的評価の問いは、客観的事実ではないものの、ある種の事実性を持つことから、世界の問いと心の問いの中間的な位置、または両者の性質を共に含むと考えられる。
 - (17) 確認の問いについては、「確認の言語ゲーム」という表現ではあるが、私の別の著作に論考があるので参考にしてほしい（佐藤 2019: 118-121）
 - (18) 正確には、「命令行為の言語ゲーム」と私は呼んでいる。これに対して問いは「質問応答の言語ゲーム」の一部である。これらの言語ゲームについては、佐藤 2013 を見てほしい。
 - (19) この場合の先取りは、多くの場合規範的な要請による先取り（佐藤 2022: 76）だろう。
 - (20) 構築主義については刊行予定の本（佐藤 2023）の中でもう少し詳しく論じている。
 - (21) 行為と社会現象の間に推論関係はないので理由ではないということ。
 - (22) 例えば、Davidson 1963。
 - (23) 動物が好きであるために、（自然のままではない）ペットとして飼育することには否定的になる、という理由は考えられるかもしれないが、動物が嫌いだからペットを飼う合理的な理由は、少なくとも私には思いつかない。
 - (24) ブランダムによれば、概念的内容を理解することは「主張から何が導かれ何が導かれないか、あるいは、何がその主張を支持する根拠で何がそれに反する根拠なのか、等々を判別できるということに依存する」（Brandom 2000=2016: 27）。
 - (25) 厳密に言えば、ブランダムの考え方と本稿の考え方は少し異なる。ブランダムは推論の流れを上流から下流への一方向的なものとしてイメージしているが、本稿では、ある問いに答えようとする中で別の問いが問われ、その答えが元の問いに返されるという双方向的な流れを想定している。そのため、上流／下流ではなく上位／下位という位置づけをしている。ただ、問いを無視すれば、結論同士の論理的な結びつきについてはブランダムの考えと同じである。
 - (26) しばしば社会科学（社会学）の目的のひとつとして言及される、批判や批評は、評価の問いに対する答えだと考えることができる。批評や批判も、理由が明らかにされ、それが「ほかのあり方があり得る」

ものであるからこそ、初めて意味を持つのだ。

(27) これは、原因が変数ではなく普遍的なものであることと対照的だ。

(28) 具体的な方法としては、統計的因果推論などが該当する。

(29) 同じ理由が他の人からも聞き出せるなら、その理由が「あり得る」ものである間接的な証拠にはなるだろうが、特定の人の理由を確認する方法としては弱いだろう。

(30) まずは調査者だろうし、一般的な人々の感覚を想定しての判断も行われるだろう。

(31) 理由を「理解」するためには、自分ならどう考えるか、どうするかを想像する必要がある。この「自分なら」の部分が少なくとも現在あるいは近い将来の A I には超えられない壁であろう。

文献

Brandom, Robert, B., 2000, *Articulating Reasons: An Introduction to Inferentialism*, Harvard Univ. Press (斎藤浩文訳、2016、『推論主義序説』春秋社)。

Davidson, Donald, 1963, "Actions, Reasons, and Causes", *The Journal of Philosophy*, 60:685-700. (河島一郎訳、2010、「行為・理由・原因」門脇俊介・野矢茂樹編・監修『現代哲学への招待 Anthology 自由と行為の哲学』春秋社、157-190)。

入江幸男、2014、「三種類の『なぜ』の根は一つか?」『メタフュシカ』35(2):59-68.

入江幸男、2020、『問答の言語哲学』勁草書房。

佐藤裕、2013、「言語ゲームと志向性——社会学的観点から」『富山大学人文学部紀要』59: 1-33.

佐藤裕、2019a、「ルールとは何か」『富山大学人文学部叢書Ⅱ人文知のカレイドスコープ』桂書房、52-61.

佐藤裕、2019b、『人工知能の社会学——A I の時代における人間らしさを考える』ハーベスト社。

佐藤裕、2022、「問いの基礎理論序説」『富山大学人文科学研究』77:53-87.

佐藤裕、2023、『ルールの科学——方法を評価するための社会学』青弓社 (刊行予定)。

Searle, John Rogers, 1969, *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge UP. (坂本百大・土屋俊訳、1986、『言語行為——言語哲学への試論』勁草書房)。

吉田啓、2021、『社会科学の哲学入門』勁草書房。